近世の室津道 ～海上交通の 要衝・室津への道～

古くから港町として栄えた室津は、寛永12年（1635年）、徳川家光によって参勤交代が制度化されると最盛期を迎えました。下関から室津までの瀬戸内海は島が多く、陸伝いや島伝いに安全に航海できましたが、室津以東の播磨灘や大阪湾は横波を受ける恐れがある大海原であったため、大名の多くが室津を船旅の起終点にしたからです。文化年間（1804年～1817年）には九州の島津、細川、黒田、鍋島、四国の蜂須賀など70余りの藩が入港しました。当時の宿場町は、箱根をのぞいていずれも本陣と脇本陣1～2軒で構成されていましたが、最盛期の室津には6軒の本陣があったこともその繁栄ぶりを物語っています。

室津を訪れたのは、大名だけではありません。江戸時代になると年貢米を集めて都市に集積するとともに、地方で生産される特産物を流通させるため、日本全国を商船が行き交うようになります。室津にも北前船や千石船が数多く入港し、さまざまな物資が運ばれました。

播磨国は池田輝政が入封し、姫路藩となりますが、その後、龍野、新宮、林田などの諸藩が成立する中で、室津だけが姫路藩の飛び地として残されました。江戸時代初期から明治に至るまで、海上交通の要衝として幕府が姫路藩に治めさせたことからも、その重要性がよく分かります。姫路城下から室津に向かう道は室津道と呼ばれ多くの人が往来しました。

室津の歴史

室津は、天平年間（729年～749年）に行基が開いたといわれる摂播五泊の一つで、古い歴史があります。中世においては、源頼朝が賀茂神社に安志、林田、室の荘園を寄進したと伝えられます。

戦国時代になると、浦上、赤松など支配者は次々と変わりましたが、港の機能は変わらず維持されました。江戸時代には参勤交代、物流の拠点として繁栄しましたが、明治時代に東京―大阪の航路が蒸気船に転換すると衰退し、近海漁業の拠点へと変化しました。

賀茂神社や浄運寺などの寺社仏閣をはじめ、廻船問屋であった豪商「嶋屋」跡（室津海駅館）、海産物問屋「魚屋」跡（室津民俗館）が往時の姿を伝えています。

賀茂神社

室津海駅館

写真提供：たつの市

STORY

時代の最先端・西洋型帆船の建造「速鳥丸」

嘉永6年（1853年）6月、アメリカのペリーが来航したことを受け、江戸幕府は国防上の理由から同年9月に大船建造禁止令を撤廃しました。これにより諸藩では大型船の製造が盛んになります。姫路藩も大型船の建造に乗り出し、4人の領民を起用。4人はジョセフ・ヒコと共にアメリカの商船オークランド号に助けられた栄力丸の乗組員で、西洋型帆船の構造・機能に詳しいことを理由に、建造工事の参加を命じられ、苗字帯刀を許されました。

室津（岩見という説もある）で造船が行われ、安政5年（1858年）に完成したこの船は、「速鳥丸」と命名されました。その後、文久3年（1863年）には「神護丸」も完成（建造場所は室津と飾磨津の両説あり）。商船としても利用されたようで、江戸への往路には米、木綿、皮革、砂糖、塩などを積み、帰路には干鰯、魚油、大豆、小麦などを姫路に運び、藩の財政をうるおしました。

朝鮮通信使が見た室津

室町時代にその起源をもつ朝鮮通信使も、対馬へわたり、瀬戸内海を経由して大坂から陸路で江戸まで至る途中で、室津に立ち寄りました。室津での朝鮮通信使の応接は、姫路藩主の勤めでした。現在のたつの市にある姫路藩御茶屋跡は、朝鮮通信使の正使、副使、従事官が宿泊したところだといわれています。

詩文でその名を知られ、製述官として第9次朝鮮通信使に同行していた申維翰（シン ユ ハン）は、当時の姫路城主である榊原政邦が応接・御馳走役を担当した様子を『海游録』に書き記しました。

琉球使節の江戸上り

琉球（現在の沖縄県）は、江戸時代までは独立した国家で独自の文化を育んでいました。慶長14年（1609年）の薩摩の侵攻により幕藩体制に組み込まれると、王国を存続するための儀礼の一つとして琉球使節の江戸参府（江戸上り）が行われました。琉球使節は100人ほどで構成され、寛永11年（1634年）から嘉永3年（1850年）の間に18回渡来しました。瀬戸内海の要港である室津にも立ち寄りました。

琉球使節行列図　たつの市教育委員会蔵　（江戸時代）